子どもに同調した役割（記号）F　子どもに有利な提案　F E
父親に同調した役割　L　父親に有利な提案　L E
自己の明確化　E　自己防衛　D
その他、葛藤　C　分離　S　不明確　N

分析の結果は、B_1 B_2場面を通じて母親は父親の叱責の影響を受け易い。

一場面は三分間であるが、その間における母親の態度の変化過程を調べてみると第三表のような結果になった。これは、前の結果を更に裏付けることになる。つまり子どもの演じた母親は父親の力に動かされ易く子どもや自分の立場を持ち出すことは少ないということである。まだ残された問題は多いが、しかし各場面にみられる態度変化は、五才児の母親に対する役割理解を示しており、人形技法の有効性を確かめることができた。

（大会抄録25—27頁）

第二表　B_1B_2場面における母親の態度の変化（1）

B_1 最初の態度	B_1 最後の態度	数	B_2 最初の態度	B_2 最後の態度	数
防衛	防衛	7	防衛	防衛	1
防衛	父の立場	6	防衛	父の立場	1
防衛	分離	1	子どもの立場	父の立場	6
防衛	自己の明確化	1	子どもの立場	分離	1
子どもの立場	自己の明確化	2	子どもの立場	葛藤	1
子どもの立場	分離	1	子どもの立場	子どもの立場	0
子どもの立場	子どもの立場	0	父の立場	父の立場	3
発言一回		2	自己の明確化	自己の明確化	1
			自己の明確化	防衛	1
			自己の明確化	父の立場	1
			不明確	自己の明確化	1
			発言一回		3

（2）

	B_1	B_2
子どもの立場に一度もたたない者	13	6
父親の立場に一度もたたない者	5	3

フィンガー・ペインティングのなかの人間関係

（クレヨン画法との比較による）

日本社会事業大学　石井哲夫
藤原貞子

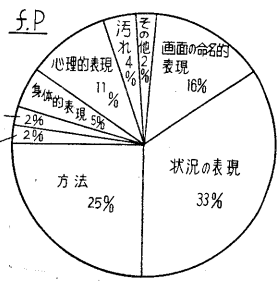
フィンガー・ペインティング（**f・p**）の特長は描いていくみちすじが今までに知っている知識や方法にたよるだけではうまくいかないことである。例えばえのぐをつける筆がない。指を筆の代用にしても、つけたえのぐはすぐなくなってしまう。画面は水でぬれているので細く輪郭を描こうとしてもくずれてしまう。といった具合で、しかもそのうちに手は汚れる、えのぐの感触がぬるぬるする。画面も汚れてうまく描けないなどいろいろ予測しなかった状態があらわれてくる。これはクレヨン画（**c・p**）のようにみちすじがはっきりしていないとみることが出来る。しかし全然みちすじがないのではなく、子どもがその困難さに積極的に立ち向っていく時みちすじが開けてくるので、その時こそ子ども達の自発性がひき出され陽画から陰画へ変化し、**f・p**の独特の開かれた境地へと入っていくのである。というように私たちは考えて研究を進めている。

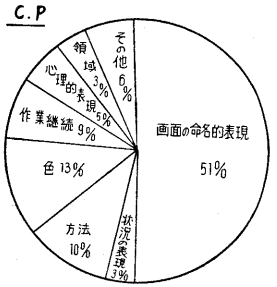
今回はf・pとc・pとを二人の未知の子どもに仲間でやらせ、その間にやりとりされたことばを対象にしたのである。前回既に同じ方法で行動を対象とした実験を行ない、一方の働きかけが相手の反応をさそい、更にそれが次の働きかけとなって最初の働きかけ手にもどってくる。そしてそれが何回もくり返される。つまり働きかけが一方的でなく双方からという関係が、f・pの方に多いことを見出したのである。その関係の更に深い探究の為にこの実験を行なった。被検者は都・区立保育園々児男・女二四名で、テープに記録されたことばの総数はf・p一八〇、c・p八五であった。そのことばを一、（内容的に）語られたテーマから、二、その働きかけの状況からとした。

結果と考察

一、どういうテーマがとり上げられたか。（左図）

c・pで半数を占めるものは〝画面の命名的表現〟であり、f・pでこの位置に位するものは〝状況の表現〟と〝方法〟である。その内容をみると、c・pでは「私は何々を描こうと思う。あなたはどう？」という意志表示や、さそいかけが多い。前にも述べたようにc・pでは描画過程のみちすじがはっきりしていることが多いので、何をしてもよいという教示はあってもそれは何を描いてもよいというぐらいの意味に理解されやすい。その為に選ばれるテーマが画面の命名など手近なものになりやすい。それにくらべてf・pの描画過程は予想で解決しない場合が多い。前にも述べたように予測しなかった状況が次々とあらわれてくるのであるから、その場その場の状況が問題で「私は今こんな状態になった。こんな気持ちを味っている。どうしようか」といった不安をあらわすことばが多い。そしてそれは画面だけでなく、身体の様子の変化、器具や場面の変化をもたらして、子どもの感覚や心理に訴えてくる。このように子どもが適応しなければならない空間が拡がることは子どもに、より自発的な態度を要求することになるのではないだろうか。





二、次に働きかけの状況はどうか。（第一表）

f・pでは相手に対する〝はっきりした働きかけ〟も〝ひとりごと〟もだいたい同じ数であるのに、c・pでは前者が後者の約三倍という結果を得た。例えば「あなた何描くの？」「お人形よ」と言えばたとえお互が見えない位置にいても事足りる。しかしf・pではその状態を説明しなければならない。それがまた複雑な体験ということになると幼児にはなかなかうまく表現出来ない。そこで「こんなになっちゃった」と汚れた手を見せ合ったり、顔を見合ったりしなくてはならなくなってくる。こういう状態は「これは何々

第一表

		実数	%
f・p	相手に働きかけたことば	89	49
	ひとりごと	91	51
c・p	相手に働きかけたことば	63	74
	ひとりごと	22	26

です」とただ命名するようなフォーマルなことばだけでは言いあらわし得ない。そして今自分が味っている状態を表現するのだから相手のことを意識して発言するというよりはむしろ自分に言いきかせるようなニュアンスを持ってくると思う。このことは自分自身に関心が集中しがちになるとも言え、**c・p**では反対に、画面や自分に熱中するより対人意識の方が強いというふうに考えられる。

結論として**c・p**では形色、画題、評価などフォーマルなテーマによる単純なさそいかけ、意志表示が行なわれやすく、二人の人間関係はフォーマルな形で成立しやすい。一方**f・p**では自分の行動に没入しやすく、対人意識はうすらぎ、個人的な、より深い表現になっていく。

個人的な深いものが相手との関係にどう影響するかは今後の研究課題であるが、刺激の多くなった社会の中で、充分にウォーム・アップし、まわりの状況に適応していく自発性をやしなうことは保育の最も大きな問題であると思うので、**f・p**のこうした角度からの研究に重点をおいている。

（大会抄録27—30頁）

幼稚園におけるカウンセリングの一方式

（第三報）

栄光幼稚園　日名子太郎
愛育研究所　多勢豊次

1　目的　前回に引き続き、幼稚園におけるカウンセリングの方式、並びに、その結果を実例よりまとめ、特に保育面における社会生活参加状況に関する評価と治療効果との関連を中心に考察した。

2　経過　全体の方式は、既報の如き方法に従い、とくに、社会性を欠きグループ・セラピーを必要とすると思われるもの一〇名（内訳年少児4名、年長児6名）を選び、一年間、二〇回にわたり毎週一回、一時間セラピーを実施した。

そして、その効果を、対仲間、対治療者、遊びの状態について、五分おきに、四つのカテゴリー（A、B、C、D）にわけて記録した。そこでは、対仲間遊びの状況の二つにつき、最も積極的状態を示すカテゴリーAの%による変化をグラフに描くことによって示し、日常保育の場面における状況は「園生活参加の状況に関する評価基準表」（抄録参照）により評価、この両者を比較した。

3　結果の考察

日常生活の状況及びセラピー時における状況に関して、一応、前記のような評価法を採用したが、これら評価の方法は、未だ完全なものと言えぬ試案であるが、整理の方法としての一案として提出した。

この結果について、個別に考察してみると、ともかく、何れのケースも、学期を追って、集団生活へ参加できるようになる社会性発達の状況がうかがわれる。

今後は、さらに、評価法の研究によって、綜合的な効果判定、整理の方法について明確にしたい。

（大会抄録30—34頁）

幼児保育とサイコセラピー（その二）

（事例を中心に）

愛育研究所　権平俊子
榎由美子